

茅の輪守り 一体 五百円



日本神話の中で、ヤマタノオロチを倒したスサノオのミコトは、遠く南の国の娘と結婚するために旅立ちました。旅の途中、蘇民将来・巨旦将来という兄弟のところで宿を求めました。

弟の巨旦将来は裕福であったのにもかかわらず、身なりの汚かった姿を見て、宿泊を拒みました。一方、兄の蘇民将来は貧しいながらも、喜んで厚くもてなしました。

その数年後、スサノオのミコトは再び蘇民将来のもとを訪れ「もし病気が流行ることがあった時は、茅の輪を作り腰につければ病気にならない」と教えました。

そして、疫病が流行したときに巨旦将来の家族は病に倒れましたが、茅の輪をつけた蘇民将来とその家族は助かりました。

この言い伝えから、「蘇民将来之子孫也」と書いた紙や木板を玄関や門に張っておくと災いが逃れるという信仰が生まれました。さらに江戸時代初期頃になると、腰に付けるというものから、茅の輪をくぐって罪や災いを祓い清めるという神事となりました。